

変わる個人金融ビジネス

—ポストコロナのビジネスモデル—

京都先端科学大学 李 立栄

新型コロナウイルスの感染拡大によって、社会の様々な分野で仕組みの再設計が求められている。金融ビジネスもその例外ではない。コロナウイルスの影響で対面活動が制限されるなか、フィンテックの普及加速により、資金決済をはじめ様々なオンライン金融サービスの利用が広がり、銀行業務の姿も大きく変貌すると予想される。

コロナ問題に伴う新しい動きとしては、デジタルライゼーションの加速度的な進展である。とりわけ、非金融分野と連携した金融のデジタル化において、①非対面・非接触型のサービスの要請の強まり、②キャッシュレスの進展、③中央銀行デジタル通貨（CBDC）の議論の高まり、の3点が挙げられる。このようなデジタルライゼーションの進展により、新しいプレイヤーが金融分野に進出するとともに、スマートフォンや人工知能（AI）などを活用した革新的なサービスにより利便性を飛躍的に向上させることが期待されている。

一方、キャッシュレス先進国とも言われた中国では、コロナ禍のもとでのさらなる個人の行動変容とそれに対応する個人金融分野におけるサービスの変革が進展している。例えば、大都市を中心に、アリペイの顔認証決済の導入が加速し、スーパーマーケットやコンビニエンスストア、ファーストフードや大型書店での「無人決済」「キャッシュレス革命」が拡大している。さらに、2019年秋以降、中国は世界の主要国で初めてとなる中央銀行デジタル通貨（CBDC）の発行への動きが加速している。すでに制度設計を終え、地域限定での実証実験を進められている。

本報告では、最近の金融デジタルライゼーションの動きを考察するとともに、キャッシュレス先進国とも言われた中国の事情を取り上げ、コロナ禍のもとでの個人の行動変容とそれに対応する個人金融分野の最新動向を紹介する。このようなデジタルトランスフォーメーション（DX）が加速度的に進展することにより、金融ビジネスの姿が今後どのように変貌していくのか、具体的な事例を取り上げながらその方向性を展望してみたい。

キーワード：金融デジタルライゼーション、フィンテック、キャッシュレス、デジタルトランスフォーメーション（DX）